特　別　寄　稿

ペルシア語のクロノロギー
── 中・近世語接点の諸相について ──

足　利　惇　氏

中世ペルシア語とは何かと問われると，答え方次第では，かなり難問だという感じがする。ここで「ペルシア」というのはイランの Fārs/Pārs 地方をさして言うのであるが，そうした場合によく対立的に「パルティア語」が方言的にはすぐに考えられる。これらについてはイスハーク・アン・ナディーム (995 A. D. 没) の『アル・フィフリスト al-Fihrist』(カイロ版) p. 25 にイブヌ・ル・ムカッファ Ibnu l-Muqaffa' (760 A. D. 頃没) の言が載せてある：

wa-qāla 'Abdu llāhi bnu l-Muqaffa'i luġāta l-fārisīyati l-fahlawīyata wa-d-darīyata wa-l-fārisīyata wa-l-ḫūzīyata wa-s-suryānīyah.

アブドゥルラーヒ・ブヌル・ムカッファが言うには，ペルシアの言語は Fahlavī (=Pahlavī), Darī, Fārsī, Ḫūzī およびシリア系語である。

fa-ammā l-fahlawīyatu, fa-mansūbun ilā fahlaha ismun yaqa'u 'alā ḫamsati buldānin, wa-hiya Iṣfahān wa-r-Rayy wa-Hamadān wa-Māh-Nihāwand wa-Āḏarbaiǧān.

Fahlavī (=Pahlavī) について言えば，それは Fahlah (=Pahlav) "パルティア" に由来し，(すなわちこれは) 五地域にあてはまる名称で，これすなわち Iṣfahān, Rayy, Hamadān, Māh-Nihāvand (メディアの Nihāvand の謂) および Āḏar-baiǧān である。

wa-ammā d-darīyatu, fa-luġatu muduni l-Madā'ini, wa-bi-hā kāna yatakallamu man bi-bābi l-maliki, wa-hiya mansūbatun ilā ḥāḍirati l-bābi wa-l-ġāliba 'alai-hā min luġati ahli Ḫurāsāna wa-l-mašriqa luġati ahli Balḫ.

また Darī について言えば Madā'in (=テーシフォーン Tēsifōn) 市の言語で，それをもって王の宮廷にいる者が話していた：それは宮廷の住者たちと結びつ

いていたし，またたいていはホラーサーンの人々の言語とか東方ではバルフの人々の言語がこれとつながっていた。

wa-ammā l-fārisīyatu, fa-yatakallamu bi-hā l-muwābadatu wa-l-'ulamā'u wa-ašbāhu-hum, wa-hiya luġatu ahli Fāris.

また Fārsī について言えば，それでモーベッドたちや有識者たち並びにかれらと同類の人たちが話していた，そしてそれはファールスの人たちの言語である。

wa-ammā l-ḫūzīyatu, fa-bi-hā kāna yatakallamu l-mulūku wa-l-ašrāfu fī l-ḫalwati wa-mawāḍi'i l-la'ibi wa-l-laḏḏati wa-ma'a l-ḥāšiyah.

また Ḫūzī（＜Ḫūzistān＝Susiana）について言えば，王や貴族が独居の時や遊戯や歓楽の場所とか，或いは従者たちといっしょにそれで話していた。

wa-ammā s-suryānīyatu, fa-kāna yatakallamu bi-hā ahlu s-sawādi wa-l-mukātabati fī naw'in mina l-luġati bi-s-suryānī fārisī.

またシリア系語について言えば，極めて教養ある人や文字の人（書記）たちが，シリア語と Fārsī との間の一種（の混淆語）として，それを用いて話していた。

当面の問題となるのははじめの三語であるが，二番の Darī すなわち宮廷（dar）語を意味するこの“御所ことば”“みやびことば”“雅語”が首都テーシフォーンのことばとして，その宮廷（サーサーン朝の）で話されていたというのは当然として，それがホラーサーンやバルフにも見出されるというのはどういう経緯によるかと言うに，これには二つの契機が考えられる。一つはパルティア語の衰滅と，もう一つはペルシア語の進出である。またこのペルシア語の進出にはこれもいろいろな要因が考えられる。すなわち迫害されたマニ教徒がペルシア語と共に東方に避難したこと，フスローイ一世（在位531—78 A. D.）以後エフタル勢力の崩壊がペルシア語の東方進出を決定的にしたこと，さらにムスリム進出にあたってゾロアストラ教徒がこれまた東方に避難したことなどがそれである。殊にこの最後の出来事と関連して興味のあるのは，イェズドやケルマーンのゾロアストラ教徒が自身の言語を Darī と呼んでいることである。これを Gabrī と呼ぶのはムスリム側から出たことで，ゾロアストラ教徒の関知したことではない。これについては拙稿「波斯「エズド」に於ける拝火教の現況」にも一部触れておいた。ゾロアストラ教徒が“東方”に居住していたことはいろいろな文献がこれを立証している。例えば，時代にややずれはあるが，二，三指摘すれば，ニザーム・ル・ムルク Niẓāmu l-Mulk の『法治書 Siyāsat-nāmah』第45章は，ニーシャープール（ホラーサーン）にいたゾロアストラ教徒 Sindbād が Rayy に赴いて自教徒を集め，その

他の勢力をも糾合して10万の兵力をもってカリフと一戦を交えた旨を記している（755 A. D.）し，Tamīmu bnu Baḥri l-Muṭṭawwi' のウイグル旅行記は,かれがカラバルガスーンに赴く途中に通過した村々に“……マグシュ聖職の儀礼にもとづく火の崇拝者たち（……'abadatu n-nīrāni 'alā maḏhabi l-maǧūsi)”がいたことを伝えている（821 A. D.)。またアッバース朝のカリフ al-Mutawakkil (861 A. D. 12月暗殺さる）はホラーサーンの太守 Ṭāhir（ニーシャープール）に命じてサイプラスの巨木を伐採させたが，この巨木はゾロアストラがゴシュタースプ（ウィシュタースプ）王の入信を記念して Kišmar の聖火殿の前に植えたと伝えられる神聖な木であったために，ホラーサーンのゾロアストラ教徒は金5万を太守に贈ってこれを阻止しようとしたが功を奏さなかったと伝えている（『Dabistān』)。これらの記載は8～9世紀にゾロアストラ教徒がホラーサーンからマーワラー・アン・ナフル Mā-warā' an-nahr（シル河以南の中央アジア）を経てウイグルにわたる地域に多数居住していたことを示すもので，この教徒の連鎖の東方の一末端は唐の都，長安につながっていたに相違ない。けだし，西安（昔の長安）出土（1955年冬）の漢蕃合璧墓誌で，漢文面に咸通十五年甲午歳（唐懿宗，874 A. D.）の紀年をもつものがあるからで，その蕃文面は中期ペルシア語で記され，1964年6月4日，京都大学伊藤義教講師によって解読せられた。唐朝にゾロアストラ教徒（祆教徒）のいたことはすでに知られているが，この墓誌は，同氏の正しい解読によってさらに明らかにした史料として高く評価せられる。他の多くの教徒がそうであるように，ゾロアストラ教徒もまた保守的であったし，かれらの操る近世ペルシア語にも，従って，かれらに独特のものがあるのは言うまでもないことで，その点は『Sad-dar Bundeheš』を一読しても容易に理解せられるのである。かかる教徒が自らの言語を Darī と称するのは，サーサーン王朝の栄光を言語の面でも正しく継承負荷せることを詮表するものであるが，もう一つ同じくこの垂統を主張するものにタージック・ペルシア語がある。このペルシア語がタージック人の主張するようなものであるかどうかについては言及し得ないが，トルコ語的要素を多数受容していることだけは明らかである。この Darī 一般について言えることは，方言的にはやはり Pārs 方言，即ち Fārsī の系統だということで，そういう意味からすれば，上に挙げたイブヌ・ル・ムカッファの5類中，問題として残るのは結局(1)パルティア語と(2)ペルシア語ということになる。

言うまでもなくパルティア語とペルシア語とは，古来，中世イラン語の西方方言中の二大双璧としてしばしば言及されるもので，古代のメディア，ペルシア両方言の中期語層と称しても過言でないほどのものであり，学者のなかには語域の丹念な検討によっ

て，メディア語域とのちのパルティア語域の不二ならざることを主張する向きさえある。かかる点はしばらく措くとして，パルティア語とペルシア語との角逐は，ついに後者の勝利をもって終りを告げた。しかし両語の歴史をのべる場合でもないからここでは深く論及しないが，サーサーン王朝初期の磨崖刻文が両語（時にはギリシア語を交えて三語）併用の建前をとっているところから，それらの刻文がペルシア語の特色をも明らかにするに寄与していることは，これを認めなければなるまい。今，試みにカアバ・イェ・ザルドシュト Ka'bah i Zardošt の西壁に造刻されているシャーフプフル一世（在位 241—72 A. D.）のパルティア語版を見てみよう。全文30行から成り，対ローマ戦に勝利を博したのち大王によって造刻された（262 A. D. 頃）功業のリストで，まさしくその Index rerum gestarum と言える。書き出しは例によって王統譜を誌してステレオタイプであるが，荘重である。

'NH mzdyzn 'L'H' ḫšypwḫr MLKyn MLK' 'ry'n W 'n'ry'n, MNW šyḫr MN y'ztn BRY mzdyzn 'L'H' 'rt'ḫštr MLKyn MLK' 'ry'n, MNW šyḫr MN y'ztn, BRY LBRY 'L'H' p'pk MLK'. 'ry'n-ḫštr ḫwtw⟨yp⟩ ZNH W ḫštrdr W ḫštr ⟨P⟩'rs ⟨Prtw⟩ Ḫwzstn……

az mazdayazn yazat Xšāypuhr šāhīn šāh Aryān ut Anaryān, kē šihr ač yazatīn, puhr mazdayazn yazat Artaχšatr šāhīn šāh Aryān, kē šihr ač yazatīn, napāt yazat Pāpak. Aryān-χšatr χvatāv⟨ēf⟩ im ut χšatrdār ut χšatr ⟨P⟩ārs ⟨Partav⟩ Xūzistān……

われはイラン（Aryān）と非イランとの，諸王の王（šāhīn šāh），マズダ教者（mazdayazn）たる天子 Xšāypuhr にして，その系譜は神々に出ずるもの——その系譜，神々に出ずるものにしてイランの，諸王の王，マズダ教者たる天子 Artaχšatr（一世）の子，王なる天子 Pāpak の孫なり。イラン国の，王権と統治権とサトラピーとはこれなり：ペルシア，パルティア，スシアナ……

以下，イラーンシャフルを構成する各サトラピーをあげ，それが貢（patibāz）を入れていることをのべている。この冒頭の一節を見ても，パルティア語の特色が明白に伺われる。下線を施したもの（重複せるものは省く）がそうであるが，対応ペルシア語形はそれぞれ順次に，man, mazdēsn, baγ, Šāhpuhr, šāhān, Ērān, Anērān, čihr, hač, yazdān, pus, Artaχšēr, χᵛatāyīh, ēn, šahryār である。両方言の相違は音韻，文法形態，シンタックス，語彙などにわたって多岐であるが，記法についても logogram の相違が目立つ。すなわち

Parth.		Pers.
'NH=az	:	LY=man
BRY=puhr	:	BRH=pus
ZNH=im	:	ZNH=ēn (cf. LZNH=im)

となっている。パルティア語版は 294 A. D. 頃の造刻とみられるナルサフ一世（在位 293—302）のパーイクーリー碑文にも登場するが，磨崖刻文は欠損の甚しいこの大碑文をほぼ最後としてパルティア語版を見せなくなり，ペルシア語一辺倒となる。つまり開祖以来常に用いられて来た二語乃至三語併用の風がすたれるのであるが，これを待たずに，ペルシア語単独使用の風が Kartīr によって積極的に打出されている点も注目に価いしよう。かれは Šāhpuhr 一世，Ōhrmazd 一世，Varhrān 一世を経て同二世の宮廷に権勢を得た人物で，後世の maγupatān maγupat に相当する hamašahr maγupat "全国（に号令するところ）のマグパト" となり，マニ教徒，仏教徒，婆羅門，キリスト教徒など異教徒の追放とゾロアストラ教の国教化とに主役を演じ，これらを誇示したかれの碑文はあまりにも有名である。こうしてペルシア語によって排除されたパルティア語ではあるが，そして今日，広義に解した場合の文学書なるものを見ても，首尾一貫してこの語で述作されたものはついに皆無に近い状況ではあるが，ペルシア語（中世および近世）は言わずもがな，その他の周辺諸語に少なからぬ語詞を借用語として残し，それを通してパルティア帝国かつての文運の盛大なりしを物語っているのである。

では，残った最後のものはペルシア語（中世）ということになるが，その運命はどのように展開したか。概論的にはこれに答えることはさして難事ではないが，細部においてはいろいろな問題が出てくる。中世ペルシア語が近世ペルシア語へと展開したといっても，その近世ペルシア語とは何か。フェルドウシーやサアディーに見られる古典期から今日のペルシア語（それはテヘラーン方言がすべてではなく，多くの俚言を含んでいる）へと歴史的に展開を跡づけてみることが必要であろう。従って，後期に指摘されない言語事実でも古典期に存在すればやはり近世語的事実とみなければならないし，近世語的事実とされているものでも，中世語に指摘されるとすれば，やはり中世語的要素ともみなさなくてはならぬであろう。

さて，一般に指摘されるところに従えば，中世，近世両語層の差違は音韻，文法形態，シンタックスならびに語彙の分野にわたっているとされており，それは誤っていない。もとより限られた紙数でそのいずれにも論及しようとすることは，はじめから不可

能の事に属する。そこでここではモルフォロギーとシンタックスとに跨がる領域において，中世および近世のそれぞれを特質づけるメルクマールとされるものを一，二捉えて，両語層の接点に存する問題の性質を明らかにしてみようと思う。

周知のように，シンタックス上の異相として指摘されるものは，中世ペルシア語（以下しばしば MP と略記）における過去時制の受動構文が近世ペルシア語（NP）ではむしろ衰滅して能動構文が新たに創造されたとする点である。Kā-m ēn saχᵛan bē guft (MP) が ke man īn suχun be-goftam (NP——『バラ園 Golestān』) と表現される，つまり“わたしによってこの語が言われた時に”(MP) が“わたしがこの語を言った時に”(NP) と表現されることを指す。もっとも MP の場合は，本来は無時制的なものであるから，過・現・未の三時に通じる。けだし -m …… guft は mein Gesagtes“わが所言”ということで，それが過去に存するか，現在するか，未来時に予想されるかは文脈がこれを決定するからである。guft は *gufta- すなわち gaub-“言う”の -ta- 分詞であり，-m …… guft が古代ペルシア語の mām Auramazdā pātuv uta-maiy xšaçam utā tya manā krtam utā tya-maiy piça krtam “Auramazdā はわれ（クシェヤールシャー一世）と，わが王土と，わが所成と，わが父の所成とを守りたまえ”や ima tya manā krtam “これがわが所成（である）”における manā krtam や piça krtam（行為者が属格で示されている）のごとき expression の continuation であるから，これは当然のことである。-m……guft が preterit として取扱われるのは，かかる動作の生起を過去におく場合が比較的多いからにすぎない。ところが，かかる受動構文とともに，NP 的表現に対応する expression をも見出すのである。『アルター・ウィーラープの書，Artā Vīrāp Nāmak』（以下 AVN と略記）にはかなり数多く指摘される。例えばその X 4–7 を見ると：

> pas hač hān patīrak āmat ātaχš i Ōhrmazd Ātur yazat ō man namāč –1 burt ut-aš guft ku drust āvar tō Artā Vīrāp i χᵛēt-hēzm i māzdēsnān paγtambar. pas man namāč burt ham ut guft ham ku āvar tō Ātur yazat kē pat gētēh hamē hēzm ut bōd i haft sālak apar ō tō nihāt ut-am χᵛēt-hēzm χᵛānēt.
>
> そののち出会ったのはオーフルマズドの火アートゥルの神。われに一礼して言うには「ようこそ来られた。マズダ教徒の使者で，湿った薪材をくべたものたるおんみアルター・ウィーラープよ」と。そこでわたしは敬礼して言った「（ようこそ）来られた。おんみアートゥル神よ。地上ではいつも七年たっ（てよく乾燥し）た薪材

と香木をおんみにくべたのに，わたしを湿った薪材をくべたものと呼ばれるとは」と。

とある。ここに見える man namāč burt ham ut guft ham “わたしは敬礼をして言った” は明らかに NP man……goftam “わたしは言った” に照応するもので，同じ書 AVN の例えば IV 14 の

kā man frapīh būt ham ut-at frapīhtar kart ham, ut kā man nēvak būt ham ut-at nēvaktar kart ham

わたしは肥えていたが，あなたによっていっそう肥えたものにされた，またわたしは美しかったが，あなたによっていっそう美しくされた。

に見える man……kart ham “わたしは……にされた” とは，見掛けの形態は全く照応するが，voice は正反対である。かれは能動構文であるが，これは受動構文である。能動構文 man guft ham “わたしは言った” の guft を行為者名詞（guftār）の転化とすることはできないから，NP の man goftam に影響されて生じたものと見るほかはなかろう。こういうと MP が NP の影響を受けたというアナクロニズムが生じるが，さりとて AVN が NP 書であるというものはなかろう。とにかくこの MP における能動構文は古いものではなく，古いものはもっぱら受動構文である。従って古いものでは自動詞と他動詞が同一のセンテンス中に併出するときは，主語は暗黙のうちに交代する。これはパルティア語でも同じことで，例えば，さきに触れたシャーフプフル一世の碑文の第4～5行をみると

W kysr TWB MKBDWt ʿL ʾrmn kynš ʿBDt ⟨W LN⟩ ʾp⟨r⟩ prwmyn ẖštr wnẖšt HWYm W prwmyn zʾwr(y?) 60000 B-byb'lšy QTLt W ʾswry' ẖštr W Mẖ ʾpr ʾswry' ẖštr prybr YHWt ẖmk ʾtrwẖt ʾwyrn W wrty'z ʿBDt W ʾHDt pty LHw HD zʾwr MN prwmyny ẖštr BYRT' W MHWZ'……

ut kaisar bit druχt ō Arman kēn-iš kirt. ⟨ut amāk⟩ apa⟨r⟩ Frōmēn χšatr vinaχšt hēm ut Frōmēn zāβar 60000 andar-Baibališ ōžat ut Asūr χšatr ut čē apar Asūr χšatr paribār būt hamak ātarv-vaχt avērān ut vartyāz kirt ut graft. pat hau ēv zāβar ač Frōmēn χšatr diz ut šahrastān……

ところが（ローマ）皇帝（フィリッポス）は再び謀叛し（かれによって）アルメニアに復讐が行われた。〈そこでわれらは〉ローマ領に侵入して（われらによって）

ローマ軍6万がバルバリッソスで殺された上に，シリア地方やシリア地方の周辺にあったところのものがことごとく焼かれ劫掠されかつ捕囚にされた。そしてこの一戦によって（われらにより）ローマ国から（次の如き）城と城市が奪取された……

初句では，皇帝が主語となっているかと思うと，かれが具格として理解され，第二句では，“われら”が主語となっているかと思うと，それが具格として理解されている。他動詞の preterit が受動構文で詮表されるためである。従ってここでは man namāč burt ham ut guft ham “わたしは敬礼をして言った” のごとき能動構文は見出せないのである。

それでは他動詞の preterit は早くからすべて受動構文であったかというと，そこに問題が出てくる。それについてはさきにのべたナルサフ一世のパーイクーリー碑文の，ペルシア語版第 10 行に注目すべきものがある：

WLNH̲ 'YK ZK prwltky HZY〈TNm WP〉WN 'whlmzdy Wwsp'n yzd'n W'nhyt ZY MRWT' ŠM M〈N〉 'lmny 'L 'yr'n štry lwny whyčwmy

ut amāk ku hān fravartak HZYTNm ut pat Ōhrmazd ut vispān yazdān ut Anāhīt īg Bānūk nām hač Arman ō Ērān šahr rōn vihēčom

われら（ナルサフ一世）がその書簡をみた（HZYTNm）とき，オーフルマズドや一切諸神ならびに Bānūk とよばれる（女神）アナーヒート（の佑助）によってアルメニアからイラン国の方へ向かった（vihēčom）。

においては HZYTNm＝vēnom と vihēčom なる二つの imperfect が見出されるが，特に注目すべきは他動詞である前者である。碑文は ut amāk ku hān fravartak vēnom “when we saw that epistle” と言って ut-mān ku hān fravartak dīt “when by us that epistle was seen” とは言っていないのである。また，パルティア語版ではあるが，シャーププフル一世のカアバ・イェ・ザルドシュト碑文の第19行には

W LHw MH̲ ZNH̲n 'trwn YNTNm W MH̲ 'bdyn HQ'YMWt

……

W LN ZNH̲n 'trwn YNTNt LHw 'wpdysywm 'YK hyp krhyd pty LN 'rw'n YWM' 'L YWM' QYN HD……

ut hau čē imīn ātarvīn dāδam ut čē abdēn istīt

……

ut amāk imīn ātarvīn dāt hau ōβdēsē'om ku hēp karihiyād pat amāk arvān rōč ō rōč gōspand ēv……

またこれらの火にわれらが寄進したり（dāδam）また慣習となっていたところのもの

……

またわれらによってこれらの火に寄進されたもの——それをわれらはこのように命じた（ōβdēsē'om）「まことに日々羊一頭……がわれらの霊のために（寄進）さるべきである……」と。

とあって，ここでは YNTNm (dāδam) は HQ'YMWt (istīt) と対応する時制でなければならぬし，preterit active である点は YNTNt (dāt) が -ta 分詞の転化であり，従って passive であるのとは異なる。'wpdysywm も直説法現在であるよりも imperfect active とみるべきで（これに対し imperfect passive は 1. 16 や 1. 22 に 'wpdšt として指摘される），これに照応する twẖšywm (1. 29) も同様に理解することが可能であろう。またもしこの twẖšywm がそうであるならば，そのすぐあとに出る HWYm にも同様な理解が許されぬこともあるまい，すなわち

……LN 'pr y'ztn ṢBW W krtkny twẖšywm W y'ztn dstkrt HWYm W pty y'ztn 'dywrpy ZNH̲ 'wnt ẖštr YB't W HHSNt ŠMH̲ W ṬBpy 'BDt……

……amāk apar yazatīn hēr ut kirtakīn tuχšē'om ut yazatīn dastkart ham ut pat yazatīn aδyāvarēf im āvant χšatr uχāst ut dirt nām ut nēvēf kirt……

……われらは神々の事と神事とに努力し，そして神々のダストカルトであったし，また神々の助けによってこれだけの国々が（われらによって）求められて保有され名声と盛栄が得られた……

となるであろう。要するに，これらにみえる imperfect active はそれぞれの動詞の古い現在幹が基礎となり，それに活用語尾を付したもので，logogram のマスクをかぶっているものも，表音書きにされた語形から，現在幹が基礎となっていたであろうことを確認することができる。もちろん，Schriftausdruck は，直説法現在と殆んど同じであり，実際の発音もおそらくは同様であろう，というのはアウグメントが接頭されていないからである。しかしこのようにモルフォロギーが同じで意味を異にする場合には，一方が他方を犠牲にして生き延びるのは普通に見受けられる現象である。インド・

アーリア語においても medio-passive voice の primary ending 中，等しく -se に終っていた単数第1，2，3人称のうちで第2人称が最後に他を排除したり (stuṣe "余は，汝は，彼は称讃する")，等しく -e に終っていた単数第1，3人称でも第1人称が最後に第3人称 (śr̥ṇvé "かれは聞えている"，íśe "彼は領有する") を排除した事実が知られている。また ṚgVeda において単複同形の主格 pánthāḥ "道" に対し，Atharva Veda では複数主格に pánthānaḥ (cf. ádvānaḥ) という -an 幹があらわれて単複の別を明らかにしている (ṚgVeda には一回だが pánthāsaḥ があって，やはり同じ目的をねらっている)。それと同じように，MP では他動詞の imperfect active は，おそらく同形同音だったであろう present indicative active に押されて存続することが出来ず，imperfect は -ta 分詞の転化せる guft, kart, etc. をもって受動的に表現する方向のみをのこすことになったのである (自動詞も同じ形をとるが，この場合は中動相的である)。そうしてみると，さきにあげた man namāč burt ham "わたしは敬礼をした"，man guft ham "わたしは言った" などはその burt や guft で明らかなように，古い imperfect active——古代ペルシア語的であると言える——の continuation ではなくて，全く新しい innovation であることがわかる。

では MP に特色的と言える，-ta 分詞の転化形による passive expression たる man guft "by me it was (has been) said" のごときは MP のみの独占かと言うと，それがそうではないのである。これは NP 古典期にも保持されている，例えば『シャーナーメ』をみると，χastan が本来"傷つける"の意味であるが，χast として実際には medio-passive 的に imperfect として登場してくるのなども，本来はこのように解すべきである。一例を出すと，ソフラーブの死をなげく母の場面をフェルドウシーはこううたっている：

bar īn gūna bīhuš bī-fitād u past
hama χalq-rā dil bar u bar be-χast
bī-fitād bar χāk čūn marda gašt
tū guftī hamī χūn-aš afsarda gašt
かかるさまにて力なく，くずおれおちぬかの女なり，
なべてのものにおのがじし，心はしぬにきずつきぬ
おのこにも似て地に倒る，そのさま
なれはかく言わん「彼の女の血潮凍りぬ」と。

(Ferdowsi's Shahnameh, vol. II Teheran

1934, pp. 518—519, verse 1430—1431)

しかもこの preterit の passive construction は，今日の近世語にも指摘される。Pārs 地方の諸俚言 Somghūnī, Pāpūnī, Māsarmī や Būringūnī など主要なものがそうで，純粋に Pārs 起源かどうか問題はあろうが，参酌さるべき重要な言語事実であるし，シラーズのユダヤ人の間にも現在時制 mī-dezim "I sew" に対し過去は -em deft "by me it was (has been) sewn" なる passive construction をみせているし，また同じシラーズの東南にある Lāristān の諸俚言にも mān tu-um dī "by me thou wast (hast been) seen", -om χelī "by me it was (has been) bought", -šu kušt "by them it was (has been) killed" のごときがある。deft, dī, χelī, kušt にはそれぞれ MP dōχt (dōχtan, dōz-; NP dūχtan, dūz-), dīt, χrīt (χrītan, χrīn-; NP χarīdan, χar-; Sogd. γr'yt-, γr'yn-; Skt. krīṇāti), kušt が対応する。

中世ペルシア語と呼ばれる層は，このように，その上限に，従来中世ペルシア語的とは考えられていなかった，むしろ古代ペルシア語的とのみ考えられていた要素を含むと共に，下限は，従来 MP 的と考えられた要素をもって深く近世語層に楔入する。こうして，"絶対的に中世ペルシア語的なもの" とみられていたものにも，"比較的に中世ペルシア語的でしかない" 要素が出てくるのである。しかしこれはむしろ理の当然であろう。そういう例としてもう一つ MP kē/NP ke をあげてこの稿のむすびとしよう。本来 relative pronoun である kē が ke として，セルジューク王朝以前の NP 古典期では，relative pronoun の機能を有するとともに，すでに単なる relative conjunction ともなっているとされている。この最後の場合の例として，例えばサアディー Sa'dī (13世紀) の『バラ園』の一節

to-rā ke dast be-larzad gohar če dānī soft?

手のふるえているお前にだ，真珠に孔をあけることをお前は能うするか。

とか，『シャーナーメ』の一節

magar zīn du tan-rā ke rīzand χūn

yakī-rā tuvān āvarīdan berūn

血の流さるる二人より，あるは

ひとりを救い出だしえん。

(ed. by Muḥammad Dabīrisyāqī, Teheran 1335/1957, p. 33)

などを見るに，ke は単なる一介の particle に堕して to-rā は動詞《ふるえる》に支

配され，tan-rā また動詞《そそぐ》に支配されている。そこには relative pronoun 的 ke の片鱗もないとされ，それが NP の特色ともされている。ではここにもう一度『アルター・ウィーラープの書』を引こう。こんどはその IV 10 である：

tō kē hē ut kē χᵛēš hē kē-m hakarč ⟨pat⟩ zīvandakān pat gētēh hēč kanīk nēvakōktar ut hučihrtar karp hač hān i tō nē dīt

地上に生きている人びとの間で，そなたのものよりももっと美しくもっとうるわしいからだをした少女を，ひとりもこれまでわたしは見たこともなかったが，そういうあなたはだれですか，そしてだれのものですか。

シンタックス的には kē (kē-m の kē) は relative pronoun でその先行詞は文首の tō であり，また従続文中でこの kē がもう一度 tō (hān i tō の tō) で承先されていると説明されるし，またこの説明はそれで一応成り立っている。しかしこの長い従続文で問題の kē が果して終始 relative pronoun (ここでは genitive) として機能しおおせたかは，すこぶる疑わしい。ここでは relative conjunction に極めて近いのではないか。形式的にはこの種の構文は MP に普通であり，NP にも一般化されている：

ān ke na-buvad mard-rā χūy e nikū, murda mī dān-aš (『Pand Nāmeh』)

善き品性のない人を，おろかものとみよ。

しかしそうした形式的解釈をこえて，AVN 所引の句をその心理的な面から掘りさげていくと，そこの kē が relative conjunction へ至近の距離にあることを感得せざるをえないであろう。

中世語と近世語との接点は，このように相互におのが要素を他方に深く楔入させ，決して直線的に截断されえないことを示している。こうした点からは，従来慣用されているパフラヴィー (Pahlavī) 語なる呼称がますます便宜となる。それは中世なる語義には少しもこだわらないからである。もちろん，そうしたパフラヴィー語なる呼称が，この論考のはじめにあげたイブヌ・ル・ムカッファの言に見える Fahlavī (=Pahlavī) とは別個のものであることは言うまでもない。そうした Pahlavī proprement dite は別として，汎称パフラヴィー語では，例えば 11 世紀初頭に北イランの Lādakān に下記の如きパフラヴィー語の刻文を有する小王の墓塔が見えると言っても，物議をかもすことは少ないであろう：

framūt kartan ēn gumbad ⟨an⟩dar zīvandakīh χᵛēš Spāhpat Abū J̌a⟨'⟩far Muham⟨m⟩ad i Vandarīn Bāvand maulā amīru ⟨l-⟩mu-

〈'〉minīn 〈a〉bar sāl tirēst aštāt 3 〈an〉dar bavandak kartan 〈a〉bar sāl tirēst ašt(ā)t haft

ヴァンダリーン・バーヴァンドの子にして maulā amīru l-mu'minīn たるスパーフパト Abū J̌a'far Muḥammad によって，その存命中，この墓塔は，383年に建設を命ぜられ，387年に完成（を命ぜられた）。

この碑文にみえる年次や，文法形態，シンタックスなどには問題があるが，当面の課題にはあまり重要ではないから，ここでは敢えて論及することをさしひかえたい。

〔付記：この小論では記法については敢えてふれなかった。従って文字の問題も省略したほか，Aramaic logogram のローマナイズにあたってもこれを記号で表示する方法もとらなかった。なお，参考文献として，比較的関係の深いものを若干挙示すれば：

Artā Vīrāp Nāmak — テキストは Jamaspji Jamasp Asa: Arda Viraf Nameh, Bombay 1902 および A. Christensen: The Pahlavi Codices K 20 & K 20 b, Copenhagen 1931, folio 2, r.–f. 29, r.

Bausani, A.: Letteratura Neopersiana, *Storia della Letteratura persiana* (A. Pagliaro e A. Bausani), Milano 1960.

Brandenstein, W. y M. Mayrhofer: Antiguo Persa, Madrid 1958 (dittos: Altpersisches Handbuch, Wiesbaden 1964 は未見).

Dabistān: The Dabistán or School of manners. Translated from the original Persian, with notes and illustrations by D. Shea and A. Troyer, Paris 1843.

Ferdousī: Šāhnāmah — テキストは上記 pp. 156–157 に挙げた。語彙は F. Wolff: Glossar zu Firdosis Schahname とその Supplementband, Berlin 1935.

Gabrieli, Fr.: L'opera di Ibn al-Muqaffa', *Rivista degli Studi Orientali*, Vol. XIII, Fasc. III, Roma 1932.

Henning, W. B.: Mitteliranisch, *Handbuch der Orientalistik*, I, 4, Leiden-Köln 1958 (以下単に *H. d. Or.* と略記).

Herzfeld, E: Altpersische Inschriften, Berlin 1938.

ditto: Archaeologische Mitteilungen aus Iran, Berlin 1929–1938.

ditto: Paikuli. Monument and Inscription of the Early History of the

Sasanian Empire, Berlin 1924.

Honigmann, E. et A. Maricq: Recherches sur les Res Gestae divi Saporis, Bruxelles 1953.

Horn, P.: Neupersische Schriftsprache, *Grundriss der Iranischen Philologie*, I, 2, Strassburg 1896–1904.

Jensen, H.: Neupersische Grammatik, Heidelberg 1931.

Kent, R. G.: Old Persian. Grammar, Texts, Lexicon, (2. ed. revised), New Haven 1953.

Lentz, W.: Das Neupersische, *H. d. Or.*

Minorsky, V: Tamīm ibn Baḥr's Journey to the Uyghurs, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XII.

Morgenstierne, G.: Neu-iranische Sprachen, *H. d. Or.*

an-Nadīm: al-Fihrist, Cairo 1348.

Niẓāmu l-Mulk: Siyāsat-nāmah — テキストは — — ed. with critical notes and commentary by H. Darke, Teheran 1962, 訳は同氏の The Book of Government or Rules for Kings, New Haven 1960.

Nyberg, H. S.: Hilfsbuch des Pehlevi, I: Texte, Uppsala 1928 (A Manual of Pahlavi, I: Texts, 1964 は筆者未見), II: Glossar, Uppsala 1931.

Rypka, J.: Geschichte der neupersischen Literatur bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts, *Iranische Literaturgeschichte* (J. Rypka), Leipzig 1959.

Sa'dī: Golestān — テキストは — — ed. by A. Furūghī, Teheran 1316/1937.

Sad-dar Bundeheš — テキストは Saddar Naṣr and Saddar Bundehesh ed. by B. N. Dhabhar, Bombay 1909.

Sprengling, M.: Third Century Iran. Sapor and Kartir, Chicago 1953.

Wikander, S.: Feuerpriester in Kleinasien und Iran, Lund 1946.〕